

ウィリアム・ルーファスの死をめぐる

遠山 茂樹

はじめに

周知のように、ウィリアム・ルーファスは一〇〇〇年八月二日、ニュー・フォレスト⁽¹⁾で狩りの最中に矢をうけて横死を遂げた。これに関して、当時の代表的な年代記『アングロ・サクソン年代記』は、次のように記している。

「一〇〇〇年。この年（一〇九九年）王ウィリアムはクリスマスにグロスタで、そして復活祭にウィンチェスタで、聖霊降臨祭にロンドンで宮廷を開廷した。

この年の聖霊降臨祭の日に、パークシャのある村で、それを見たといわれている多くの人びとが報告しているように、地面から血がぶくぶくと噴き出しているのが目撃された。その後、聖ペテロの鎖の祝日（八月一日）の翌朝、王ウィリアムは狩りの最中に、かれの家臣のひとりによって矢で殺された。その後、ウィンチェスタに運ばれ、大聖堂に埋葬された。かれの治世第一三年度のことであった」⁽²⁾（亀甲パーレン内は筆者による付記。以下、同様）。

右の文中、「地面から血がぶくぶくと噴き出しているのが目撃された」といったような表現は、あたかも王の死を予

(1) ウィリアム・ルーファスの死をめぐる

言するかのようで不気味な印象すら受けるが、ウィリアム・ルーファスが狩りの最中に亡くなったことは、まがうことなき事実である。

かつて人類学者のマーガレット・マリーは、ルーファスは異教的な豊饒神信仰により、神の生贄として殺害されたと主張したが、今日ではこのような見方は否定されているといつてよい。歴史的にみて問題なのは、その死が事故によるものであったのか、それとも陰謀によるものであったのかということである。この点については欧米の歴史家たちの間でも見解は分かれるところであるが、ひるがえってわが国の研究状況をふりかえってみるに、この問題に関する立ち入った考察は、管見の限りでは、目にしない。本稿の目的は、ウィリアム・ルーファスの死が同時代の人びと、あるいは後世の歴史家たちによってどのように捉えられてきたかをさぐり、ルーファスの死をめぐる問題を検討してみることにある。欧米諸国においてもルーファスの死を真正面からとりあげた研究はそう多くはないが、それでも一定の研究蓄積があり、本稿もそれに多くを負っている。

本論では、第一節において、ウィリアム・ルーファスの死を招いた狩りの様子を伝える同時代の基本的史料を確認し、ルーファスの死が同時代人によってどのように捉えられていたかをみる。関連する史料、とりわけルーファス死亡時の状況を伝えている当時の史料については、当該箇所の文章を掲げ、その試訳を示す。第二節において、ルーファスの死は陰謀によるものだとする陰謀説をとりあげ、その論点を開示・説明する。第三節では、ウォレン・ホリスターの論文に依拠しつつ、陰謀説に対する反論をとりあげる。最後に、第四節において、近年エマ・メイソンによって提示された新しい解釈を紹介し、その妥当性をさぐってみる。

全体として、小稿はウィリアム・ルーファスの死に関する筆者の覚書である。

一、ルーファスの死と年代記作者たち

ウィリアム・ルーファスの死に関する主史料は年代記の類に限られる。それゆえ以下においては、当時の諸年代記がルーファスの死の状況をどのように伝えているか、具体的にみていくこととする。年代記作者のなかでルーファスのことを最もよく知っていたと考えられるのは、アンセルムムの秘書として仕えたカンタベリ大司教座聖堂の修道士イードマーである。かれはルーファスの教会に対する不当な取り扱いを痛烈に批判しているが、とりわけ空位となった司教や修道院長の職位を埋めることなく、聖界所領からあがる収益を強奪し、神に対する不敬な言動を繰り返していたルーファスに激しい憎悪の念を抱いていた。⁽⁴⁾ イードマーはその著『イングランド同時代史』(*Historia Novorum in Anglia*)において、ルーファスの死に関連して次のように述べている。

〈Siquidem illa die mane pransus in silvam venatum ivit, ibique sagitta in corde percussus, impenitens et inconfessus e vestigio mortuus est, et ab omni homine mox derelictus. Quae sagitta utrum, sicut quidam aiunt, iacta ipsam percusserit, an, quod plures affirmant, illum pedibus offendentem superque ruentem occiderit, disquirere otiosum putamus ; cum scire sufficiat eum justo iudicio Dei prostratum atque necatum.〉(試訳「その日(一)〇〇年八月二日、朝食をとった後、かれ〔ウィリアム・ルーファス〕は狩りをするため森にでかけた。そこで心臓にまで達する矢が突き刺さり、悔俊も贖罪もすることなく、即死した。そして、すぐに誰からも見捨てられた。一部の者が言うように、矢が飛んできてかれに突き刺さったのか、あるいは多くの者が語っているように、足がもつれて転倒し、そのはずみで亡くなったのか、これは深く詮索しても無駄であるように思われる。神の正当な審判に

(3) ウィリアム・ルーファスの死をめぐって

よってかれは打倒され、殺害されたことを承知しておけばじゅうぶんである。⁽⁵⁾」

イードマー自身は、王は矢に当たって亡くなったと述べているが、つまりいて転倒し、そのはずみで亡くなった可能性も示唆している。ルーファスの死については冷淡なまでの筆致で、本稿の冒頭に記した『アングロ＝サクソン年代記』同様、その叙述内容は簡潔をきわめている。とりわけ最後の部分の「神の正当な審判によってかれは打倒され、殺害されたことを承知しておけばじゅうぶんである」という文言は、ルーファスの教会に対する不遜な態度を想起すれば、納得がいく。⁽⁶⁾とりわけイードマーが所属していたカンタベリ司教座大聖堂はルーファスによって多くの財産を収奪されたといわれているところからすると、イードマーにルーファスの死を嘆き悲しんだ様子がみられないのも、けだし当然のことであつたといえよう。

ウィリアム・ルーファスは「ほとんどすべての人びとに嫌悪され、神にとつてもいまわしい存在であつた⁽⁷⁾」と書き残した『アングロ＝サクソン年代記』（E版）の作者も、イードマー同様修道士（ピーターバラの修道士）であり、ルーファスに対しては強い反感を抱いていたにちがいない。

こうしたルーファス王の邪悪なイメージについては、トマス・キャラハン・ジュニアが年代記作者の「セコンドジェネレーション第二世代」⁽⁸⁾と呼んでいる修道士たちによって仕上げの筆が入れられることになる。この世代の年代記作者はイードマーや『アングロ＝サクソン年代記』よりも幅ひろい叙述をおこなっており、ルーファスの性格描写にあたっては、従来にはみられない逸話も加味している。それでも叙述の大半はオリジナルなものではなく、かれらの著作がルーファスの死後二〇年以上たつてから書かれたものである点は留意する必要がある。⁽⁸⁾

そのうち最も古いと思われるのがジョン・オヴ・ウースタの作品で、執筆年次は一一二四年頃と推定される。⁽⁹⁾ルーファスについての情報は基本的に『アングロ＝サクソン年代記』とイードマーに依拠しているといわれているが、ルーファ

アスの死については次のように記している。

〈Deinde .iiii. non. Aug., feria .v., indictione .viii., rex Anglorum Willelmus iunior, dum in Noua Foresta, que lingua Anglorum Ytene nuncupatur, uenatu fuisset occupatus, a quodam Franco, Waltero, cognomento Tirello, sagitta incaute percussus, uita finit, et Wintoniam delatus, in Veteri Monasterio, in ecclesia sancti Petri est tumultatus. Nec mirum, ut populi rumor affirmat, hanc proculdubio magnam Dei uirtutem esse et uindictam. Antiquis enim temporibus, Eaduardi scilicet regis, et aliorum Anglie regum predecessorum eius, eadem regio incolis Dei cultoribus et ecclesiis mitebat uberrime, sed, iussu regis Wilelmi senioris, hominibus fugatis, domibus semirutis, ecclesiis destructis, terra ferarum tantum colebatur habitatione, et inde, ut creditur, causa erat infortunii. Nam et antea eiusdem Wilelmi iunioris germanus, Ricardus, in eadem foresta multo ante perierat, et paulo ante suus fratruelis, Ricardus, comitis scilicet Normannorum Rotheri filius, dum et ipse in uenatu fuisset, a suo milite sagitta percussus interit. In loco quo rex occubuit, priscis temporibus ecclesia fuerat constructa, a sed patris sui tempore, ut prediximus, erat diruta.〉(試訳「わがこゝろ」一〇〇〇年八月二日木曜日「国王ウィリアム二世はイングリランド人の言葉でエドワードを呼んでいるニュー・フォレストで狩りをしている最中に、テイルルという姓のフランス人ウォルタが不用意に放った矢が突き刺さり、その生涯を閉じた。王はウィンチェスタに運ばれ、旧修道院のなかにある聖ペテロ教会に埋葬された。世評によれば、これは疑いもなく神の強大かつ驚異的な報復を意味していた。なぜならば、過去において、すなわちエドワード王の時代ならびにかれの先祖にあたる他のイングリランド諸王の時代、この地域には教会や神を崇拜する人びとが多数住んでいた。しかし、ウィリアム二世の命によって、住民は放逐され、家屋は倒壊し、その土地は野獣だけの棲みかになってしまったからである。

これがその不幸なできごとの原因であることはたしかである。というのも、以前、ウィリアム二世の兄リチャードが同じ森でだいぶ前に亡くなっており、少し前にはかれの甥リシャール、すなわちノルマンディ公ロベールの息子も、みずから狩りをしている最中にかれの騎士が射た矢が突き刺さり、死亡しているからである。王が倒れた場所には、かつて教会が建っていたが、上述したように、かれの父親の時代にとり壊された。⁽⁶⁾」

王に致命傷を負わせた矢を射った人物として『アングロ＝サクソン年代記』やイードマーの年代記にはみられなかったウォルタ・ティレルの名が挙げられている点、ウィリアム征服王によるニュー・フォレストの創設がウィリアム・ルーファスの死のみならず、ルーファスの兄リチャードならびに甥のリシャールの死とも結びつけられている点が注目される。後者の点については、以下にとりあげるウィリアム・オヴ・マームズベリやオルデリク・ヴィターリスにも同様の捉え方がみられる。すなわち、ウィリアム・オヴ・マームズベリは「神の厳しい審判によって」(severo Dei iudicio) ルーファスとリシャールは死に遭遇したと述べており、オルデリクも同様にウィリアム征服王の二人の子息と孫がニュー・フォレストで落命したことに触れ、「神に捧げられたいくつもの建造物」(consecratas aedes) すなわち複数の教会が、野獣の棲みかに充ちされていたことに対する神の怒りを表明している。⁽⁷⁾

また、右に引用したジョン・オヴ・ウースタの叙述の最後にみられる文言、すなわち「王が倒れた場所には、かつて教会が建っていたが、上述したように、かれの父親の時代にとり壊された。」という文言からは、ウィリアム征服王によるフォレストの創設が神の怒りを招き、そのことがひいてはルーファスの死につながったという見方が明瞭に読みとれる。

一二世紀イングランドではもっとも評価の高い歴史家のひとりとされるウィリアム・オヴ・マームズベリ(一〇九五―一四三年頃)は、ルーファスの死をどのように捉えているであろうか。かれはその著『イングランド王事績録』

(*Gesta Regum Anglorum*)のなかで、狩り当日の様子を伝えているが、それに先立ってルーファス自身が前夜にみた夢やある修道士がみたという夢について述べている。それはあらまし次のようなものであった。

ルーファス自身は、瀉血され、その血が天まで噴き上げて太陽を覆い隠し、昼が夜に変わる夢をみた。夢から覚めると、侍従らに灯りを持って来るよう告げ、そばから離れないよう命じた。ルーファスは長いこと寝つけなかった。

夜明け前に、一人の外国人修道士がロバート・フィッツハイモのもとにやって来て、自分がみたばかりだという恐ろしい夢について語った。それによると、王はいつものように威嚇するような尊大な態度で教会のなかに入っていく、軽蔑するような目つきで、その場に居合わせた会衆を睨みつけた。そのあと荒々しく磔のキリスト像をつかむと、その腕をかじり、足を噛み切らんばかりであった。キリストの像はしばらく耐えていたが、王に蹴りかかると、王は転倒した。倒れた王の口からは大量の火炎が噴き出し、煙がもくもくと立ち上がって星空をなめ尽くした。

ロバートが急いで王のもとに行き、この話をする、王は一笑に付し、修道士が夢をみるのは金欲しさのためだ。その修道士に百シリングめぐんでやれ、と返答したという。それでもやはり、ルーファスは動揺を隠せず、長時間にわたって、予定通り狩りにでかけるべきかどうか悩んでいた。側近たちも、生命の危険を冒してまで夢の真意を確かめるには及ばないと助言し、王の慰留につとめた。それゆえ、ルーファスは午餐前は狩りにでかけず、重要な業務に没頭して気を紛らわしていたとい⁽¹³⁾う。

なんとも不吉な夢であるが、この逸話はルーファスの冒瀆的な振舞いのみならず、浪費癖のあった王の性格をつかむが⁽¹⁴⁾ わせる。問題の八月二日、ニュー・フォレストでおこなわれた狩りの状況については、ウィリアム・オヴ・マームズベリは次のように書き記している。

〈Mox igitur post cibum in saltum cognoment Tirel, qui de Frantia liberalitate regis adductus venerat. Is, ceteris per moram venationis quo quemque casus tulerat dispersis, solus cum eo remanserat. Lanque Phebo in oceanum proclivi, rex cerno ante se transeunti, extento nervo et emissa sagitta, non adeo seum vulnus infixit, diutile abhuc fugitantem uniacitate oculorum prosectus, opposita contra violentiam solarium radiatorum manu. Tunc Walterius pulchrum facinus animo parturiens, ut rege alias interim intento ise alterum ceruum, qui forte propter transibat, prosterneret, inscius et impotens regium pectus (Deus bone!) letali harundine traiecit. Sautius ille nullum verbum emisit, sed ligno sagittae quantum extra corpus extabat effracto, moxque supra vulnus cadens, mortem acceleravit. Accurrit Walterius: sed quia nec sensum nec nocem hausit, perniciouser cornipedem insiliens beneficio calcarium probe evasit. Nec vero fuit qui persequeretur, illis coniventibus, istis miserantibus, omnibus postremo alia molentibus: pars receptacula sua munire, pars furtivas predas agere, pars regem novum iamianque circumspicere. Pauci rusticanorum cadaver, in reda caballarum compositum, Wintoniam in episcopatum deuexere, cruore undatum per totam uiam stillante. Ibi infra ambitum turris, multorum procerum conuentu, paucorum planctu terrae traditum.〉(試訳「午餐後ほどなくして、王は少数の随行者と連れ立って、その森に急行した。同行した者のなかで最も親しかったのはウォルタで、姓はティレルといった。ウォルタは気前のよい王によってフランスから呼び寄せられていたのだった。狩りが進むにつれ、他の者は行き当たりばったりで四散したが、ウォルタだけはずっと王といっしょであった。太陽はすでに西の方に傾きはじめていた。そのとき一頭のアカジカが王の前を通りすぎた。王が弓を引いて、矢を放つと、アカジカに当たったが、傷は浅かった。しばらくの間、王は逃げる鹿をするどい眼差して追いかけて、手をかざして強い陽光をさえぎった。このときウォルタは貴族にありがちな野心を抱いた。王の注意が他に向いていたすぎに、偶然近くを通りかかった別のアカジカをみずか

ら仕留めようとしたのである。ところが、(何といふことか!)意図せずして、自制もきかず、かれは致命的な矢を放つてしまい、それが王の胸を貫通したのである。負傷した王はひとことも言葉を発せず、矢柄を身体から突き出していたところで折り取った。王は傷ついて倒れこみ、それが王自身の死期を早めた。ウォルタはすぐさまかけよったが、王に意識がなく、話もできないと知ると、すばやく馬に飛び乗り、拍車を上手に駆使しながら、猛スピードで逃走した。実際、あとを追いかける者はひとりもいなかった。ある者は逃走を黙認し、他の者はかれに同情した。とどのつまり、すべての者は他にやるべきことがあったのである。ある者はみずからの避難場所を要塞化し、ある者は秘密裏に略奪をはたらき、またある者は新しい王をみつけるのに躍起になっていた。王の遺体は少数の農民の手で馬車にのせられ、ウィンチエスタの大聖堂まで運ばれた。道すがら血がぼたぼたと落ちた。ウィンチエスタでは塔の真下の地べたに遺体が置かれた。多数の貴顕が列席したが、哀悼の意を表した者はほんのわずかであった。(15)

マームズベリのウィリアムによれば、狩りが始まった頃、「太陽はすでに西の方に傾きはじめていた」。また、最初の鹿を射止めるのに失敗すると、「しばらくの間、王は逃げる鹿をするどい眼差しで追いかけて、手をかざして強い陽光をさえぎった」。こつした表現にみられるように、年代記作者ウィリアムの描写は写実的で、じつに生き生きとしている。(16)

現場に居合わせたものがウォルタを追跡せず、また王の遺体にもかまわなかったというのはおそらく本当であろう。フランク・パロウによれば、ルーファスの死はまったくの驚きであり、すべてが混乱の渦に巻き込まれたのである。誰もが自分のことしか念頭になかったのは、ある意味では当然であった。狩りに同行していた連中も、右にみたように、自分の城の防備を固めたり、略奪をはたらいたり、王の後継者問題に思いを馳せたりとさまざまであった。王の遺体は、仕留められたイノシシが運ばれる時と同じように荷車でウィンチエスタまで運ばれ、翌日埋葬された。(17)多くの貴族諸侯が列席したが、悲嘆にくれる者はほとんどいなかったという言葉の裏には、聖職者たるウィリアム・オヴ・マームズベ

リのルーファスに対する冷淡な心情がみてとれる。

ウィリアム・オヴ・マームズベリとやらんで重要な歴史家であるオルデリク・ヴィターリス（一〇七五年～一一四二年頃）は、どのような記述をのこしているであるつか。周知の『教会史』(*Historia ecclesiastica*)に拠り、ルーファスが狩りにでかける直前の様子からみてみよう。

ルーファスが午餐をすませ、狩りにでかける準備をして長靴をはいていると、ひとりの鍛冶工が六本の弓矢を持ってきた。王はできればえを称賛し、喜んでそれを受け取った。そして、これから起こるべきことなど予想だにせず、四本の矢は自分用に取っておき、残りの二本をウォルタ・ティレルに与えるところ言った。「最も鋭い矢は、致命的な矢を射るすべを知っている者に与えられるのが道理というものだ」(*Iustum est inquit rex ut illi acutissimae dentur sagittae. qui letiferos inde nonerit ictus infigere.*)。その後、廷臣たちが王のまわりにあつまって雑談をしていると、ひとりの修道士がグロースタからやって来た。かれは修道院長セル口の書簡を携えていた。

書簡の内容を聞いたルーファスは笑い出し、ウォルタに向かってからかい半分にこう言った。「ウォルタよ、汝は、汝が聞いたことにしたがって、正しいことをなすがよい」(*Gualteri, fac rectum de his quae audisti.*)。するとウォルタは「確かにそういたします、殿」(*Sic faciam domine.*)と返答した。⁽²⁰⁾

修道院長セル口の書簡には、神がルーファス殺害を企図しているという修道士のみた夢が書かれてあった。神は王が教会を不当に扱ったことに対する罰として、それをたくらんでいたのである。⁽¹⁹⁾換言すれば、神はルーファスの不敬に対して、死刑の宣告を下したのである。

物事に無頓着であったルーファスは警告をことごとく無視したばかりか、すっかり自らの運命を予告するようなことを口に出している。右に引用したルーファスとウォルタとのやりとりをふりかえってみると、ルーファスがウォルタに発した言葉はなにやら意味ありげで、実に皮肉がきいているといつべきである。⁽²⁰⁾

問題の狩りの様子や王の死後、狩りに同行した王弟ヘンリがウィンチェスタの財宝库をおさえ、ウィリアム・ド・ブルトゥイユとイングランド王位継承権の正当性をめぐって口論になったときの状況について、オルデリクは次のように書き残している。

His dictis celer surrexit et cornipedem ascendens in siluam festinauit. Henricus comes frater eius et Guillelmus de Britolio aliique illustres ibi fuerunt, in saltum perrexerunt, et uenatores per diuersa rite loca dispersa sunt. Cumque rex et Gualterius de Pice cum paucis sodalibus in nemore constituti essent, et armati praedam auide expectarent. subito inter eos corrente fera rex de statu suo recessit, et Gualterius sagittam emisit. Quae super dorsum ferae setam radens rapide uolauit, atque regem e regione stantem letaliter uulnerauit. Qui mox ad terram cecidit, et sine mora proh dolor exspirauit. Vno itaque prostrato terrigena, fit multorum commotio maxima. horribilisque de nece principis clamor perstrept in silua. Henricus concito cursu ad arcem Guentoniae, ubi regalis thesaurus continebatur festinauit, et claues eius ut genuinus haeres imperiali iussu ab excubitoribus exegit. Illuc etiam Guillelmus de Britolio anhelus aduenit. callidoque meditato preueniens e contra obstitit. 'Legaliter' inquit 'reminisci fidei debemus. quam Rodberto duci germano tuo promissimus. Ipse nimirum primogenitus est Guillelmi regis filius, et ego et tu domine mi Henrice hominum illi fecimus, quapropter tam absentem quam presenti fidelitas a nobis seruanda est in omnibus. In seruitio Dei iam diu laborauit. et Deus illi ducatum suum quem pro eius amore peregrinus dimisit, nunc sine bellico tumultu cum paterno diademate resituit. Inter haec aspera lis oriri cepit, et ex omni parte multitudo uirorum illuc confluit, atque presentis haeredis qui suum ius calumniabatur uirtus creuit. Henricus manum ad capulum uinaciter misit, et gladium exemit, nec extraneum

quemlibet per frivolum procrastinationem patris sceptrum preoccupare permisit.) (試訳「もし言つと、かれ(ルーファス)はさつと立ち上がつて馬に乗り、森に急行した。弟の伯ヘンリ、ウィリアム・ド・ブルトウイユ、その他の貴顕がいつしよであつた。一行が森に入ると、いつもように狩人があちこちに差し向けられた。王とボワのウォルタはその森で少数の供の者と配置についた。武器を持つて今かいまかと獲物がくるのを待つていた。すると突然一頭の獣が疾走しながらこれらの間に割つて入つてきた。そのため、王は持ち場から後退し、ウォルタが矢を放つた。矢は猛烈な速さでその獣の毛髪をかすめながら背上を通過し、軌道と同一線上に立つていた王に致命傷を負わせた。王は即座に地面に倒れ、口にするのも恐ろしいことだが、すぐさま絶命した。この人間(ルーファス)が亡くなると、多くの者が大混乱に陥り、王の死を告げる恐ろしい叫び声が、森じゅうに響きわたつた。ヘンリは王の財宝が保管されていたウインチェスタの城に急行し、正当な後継者として城の番人たちに尊大な態度で鍵を要求した。ウィリアム・ド・ブルトウイユも息をきらせてその場に到着し、ヘンリの抜け目ない意図を見越して、異議を申し立てた。そして、次のように言つた。「当然のことながら、我々は貴君の兄ロベール公に対して約束した忠誠の誓いを想起しなければなりません。というのも、ロベール公はウィリアム王の長子であり、貴君と私は、ヘンリ殿、ロベール公に対して臣従の誓いを立てており、それゆえにかれがいてもいなくても、すべての点において我々は公に忠実であらねばなりません。ロベール公は長らく神への奉仕に精進して参りました。現今、神はロベール公が神のために十字軍士として旅立つさいに残していったかれ自身の公国を、父親の王冠ともども、戦いを交えることなく、かれに返還したのです。」こつした状況下で、辛らつな言い争いが始まり、あらゆる所から大勢の人びとがあつまつてきて、その場に居合わせ、自分の権利を主張した相続人(ヘンリ)の力が増大した。ヘンリは手を剣のつかに置き、刀身をさつと抜いた。かれは、誰であれ、根拠が薄弱な遅延によつて父王の笏を先取しようとする異邦人がゆるせなかつたのである。」⁽²¹⁾

右に掲げたオルデリク・ヴィターリスの記述と前述したウィリアム・オヴ・マームズベリのそれを比較してみると、細部において相違が認められる。たとえば、ウィリアム・オヴ・マームズベリによれば、ウォルタ・ティレルはつねに王と行動を共にしていたが、オルデリクによれば、少数の供の者もいっしょであった。また、前者ではルーファスが致命的な矢を受けたのは、ティレルが「別のアカジカ」を仕留めようとしたときで、つまりは二頭の鹿が想定されている。ところが、後者では鹿は一頭しか登場しない。さらに、ウィリアム・オヴ・マームズベリによれば、王は胸に突き刺さった矢柄をみずから手で折り、それが王の死期を早めたという。

これに対して、オルデリクは王が即死した事実を、口にするのも恐ろしいこととして、簡潔に叙述しているにすぎない。こうしたちがいはあるものの、王に致命傷を与えた矢を射ったのがウォルタ・ティレル―オルデリクの表現では「ボワのウォルタ」―であり、しかもそれはけつして意図的なものではなく、偶発的なものであったという点で、「両年代記作者は共通している。

オルデリク・ヴィターリスはルーファスの死後、弟のヘンリがとった行動とウィリアム・ド・ブルトウイユとの口論についても言及しているが、これについては後段であらためて触れることにしよう。

次いで、一―二九年から一―三三年の間に執筆をおこなったと推測されるハンティンドンのヘンリは、その著『イングランド人の歴史』(*Historia Anglorum*)のなかで次のように書き記している。

〈Millesimo centesimo anno, rex Willelmus, tercio decimo regni sui anno, uitam crudelē miserō fine terminauit. Namque cum gloriose et patrio honore curiam tenuisset ad Natale apud Gloucester, ad Pascha apud Wincester, ad Pentecosten apud Landoniam iuit uenatum in nouo foresto in crasino kalendas Augusti. Vbi

Walerus Tiral cum sagitta cerno intendens, regem percussit iniscius. Rex corde ictus corruit, nec uerbum edidit. Paulo siquidem ante sanguis uisus est ebullire a terra in Berescyre.) (試訳「一〇〇〇年、ウィリアム王は治世第一三年度に、哀れな死をもつてみずからの残忍な生涯を閉じた。そのわけは、次の通りである。王はクリスマスにはグロースタで、復活祭にはウィンチエスタで、聖霊降臨祭にはロンドンで、はなばなしく、かつ父祖伝来のやり方で盛大に宮廷を開廷した後、八月二日にニュー・フォレストに狩りにでかけた。そこでウォルタ・ティレルはアカジカに向けて矢を放ったが、意図せずして王を突き刺してしまった。心臓を射抜かれた王は、ひとことも言葉を発しなかった。その少し前に、バークシャでは地面から血がぶくぶくと噴き出すのが目撃された。」)⁽²³⁾

みられるように、ここでもウォルタの放った矢は「意図せずして」(iniscius)王に当たったのであり、謀殺ではなかったことが暗示されている。ルーファスの最期の様子を描写するにあたり、ハンティンドンのヘンリが『アングロ＝サクソン年代記』に依拠していることは、本稿の冒頭に掲げた『アングロ＝サクソン年代記』の記事を想起すれば、おのずと明らかである。⁽²³⁾

以上みてきた同時代の年代記作者たちの叙述をふりかえってみると、おしなべてウィリアム・ルーファスの死を偶発事件「すなわち「事故」(accident)にすぎぬものとして描いている。つまり、ルーファスは「はからずも」(accidentally)流矢に当たって横死したのである。と同時に、それはルーファスが教会を圧迫し、自堕落な生活をおくったことに對する当然の報いとみなされていたことが明らかである。同時代人の目からみれば、ルーファスは自分自身の犯した罪に對する罰として夭折したのであり、その死はひとこと言えば天罰だったのである。⁽²⁴⁾

また、ウィリアム・オヴ・マームズベリ、オルデリク、ジョン・オヴ・ウースタは、ルーファスのみならず、かれの兄や甥の死をウィリアム征服王によるニュー・フォレストの創設と結びつけている。この点も興味深いところで、こつ

した年代記者たちの捉え方には、ウィリアム征服王によるフォレストの創設が「罪」であり、王族の死はそれに対する「罰」であるという見方が如実に示されている。⁽²⁵⁾

問題の矢を射った人物については、『アングロ・サクソン年代記』の作者やイードマーは明示していない。だが、トマス・キャラハン・ジュニアのいう「第二世代」^(セカンド・ジェネレーション)の年代記者たちはウォルタ・ティレルの名前を挙げている。後世において、ルーファスの殺害者としてウォルタの名が取りざたれるようになるのは、そのためである。⁽²⁶⁾

碩学エドワード・フリーマンは、今をさかのぼること一世紀以上も前にこの問題をとりあげ、次のように述べている。「ウィリアム（ルーファス）はウォルタ・ティレルか他のだれかの手により、不慮の死を遂げたのかもしれない。あるいはまた、かれはウォルタ・ティレルか他のだれかの手により、叛逆によって（by treason）死去したのかもしれない」と。要するに、だれの手によって、何故に死亡したのか、明確なことは言えない、というわけである。

しかしながら、フリーマンがルーファスの死に関して、謀殺の可能性を示唆している点は留意すべきである。実際、後世の歴史家のあいだでは、ルーファスの死は陰謀による謀殺ではなかったか、とする説、いくなれば陰謀説が有力な説として浮上してくるのである。これについては、節を改めてみてみよう。

二、陰謀説

ウィリアム・ルーファスの死をめぐっては、後世の歴史家たちも少なからず関心を抱いてきた。概して言えば、ルーファスの死の背後に王弟ヘンリとその支持者の存在をみる陰謀説が有力である。すなわち、ヘンリをイングランド王位につけるために、クレア家主導で陰謀が企てられ、ウォルタ・ティレルの手によってルーファスは殺害されたとする説

である。前節でみた同時代の史料でも、マームズベリのウィリアムやオルデリク・ヴィターリスといった当時の歴史家がウォルタ・ティレルの名を挙げているところから、ウォルタはルーファス殺害の実行犯とみなされるに至ったものと思われる。

ルーファスの死直後におけるさまざまなきことは、確かにそうした疑念を抱かせるにじゅうぶんなものがあつた。ウォルタはルーファスの死後、すぐさまニュー・フォレストからフランスのピカルディにある自分の領地に逃走している。この逃走が疑惑を生んだことは、容易に察しがつく。

一方、狩りに同行していた王弟ヘンリは、兄の死を知るや否や現場を離れ、ウィンチェスタに急行して王の財宝庫を掌握した。前節でみたように、このとき有力諸侯のウィリアム・ド・ブルトウィユは長兄ロベールこそが正当なイングランド王位継承者であることを主張し、ヘンリと口論になっている。ウィリアムは長子相続の慣行に従つて、長子ロベール・クルトウーズにイングランド王位の正当な継承権があることを主張したのである。だが、ヘンリは聞く耳をもたず、イングランド王位を強奪する。⁽²⁸⁾

『アングロ・サクソン年代記』によれば、八月二日に殺されたルーファスは翌朝、埋葬された。埋葬後、側近たちは弟ヘンリを王に選んだ。ヘンリは直ちにウィンチェスタの司教職をウィリアム・ギファードに授与し、それからロンドンに向かった。オルデリクによれば、このときにはムラン伯ロベールも同行していた。そして八月五日にヘンリはウエストミンスター修道院でロンドン司教モリスの手から王冠を授かり、王として聖別を受けた。カンタベリー大司教アンセルムはいまだ亡命中の身であつた。⁽²⁹⁾

こうして、ヘンリはルーファス没後三日目にイングランド王位に即いた。陰謀説を主張する歴史家たちは、ヘンリによる王位篡奪が迅速におこなわれた点を強調する。たとえば、クリストファ・ブルックはヘンリが王位を奪取した、その素早さには目を見張るものがあるとして、事前にかれを支援する諸侯がいなければ、兄王の死から三日目にウエスト

ミンスターで戴冠式を挙行することは不可能であつたらう、と述べている。⁽³⁰⁾ダンカン・グリーンネル＝ミルンに言わせれば、こつした素早い行動は事前の計画があつたればこそであつた。⁽³¹⁾

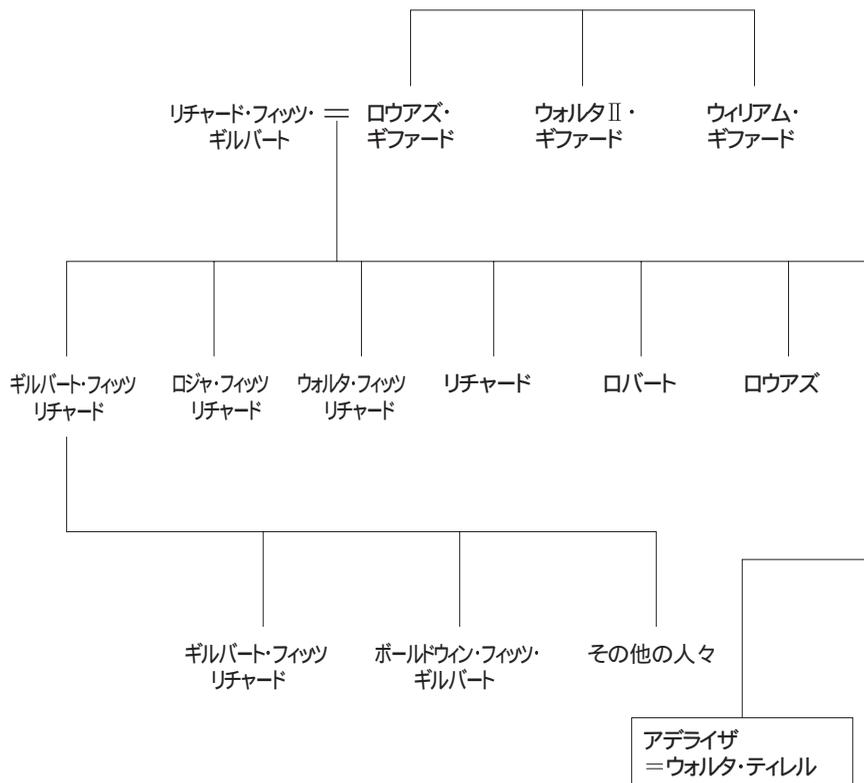
確かにヘンリは事を迅速にすすめる必要があつた。周知のように、長兄ロベールは第一回十字軍に赴く際に、ノルマンディ公国をルーファスの抵当に入れ、遠征費用を捻出していた。ブルックによれば、ロベールは出発にさいしてルーファスと協定を交わし、イングランド王国はロベールが、またノルマンディ公国はルーファスがそれぞれ相続することを約束していた。だが、末子ヘンリについてはひと言も触れられていなかった。それゆえ、もしもロベールが、ルーファスが亡くなる前に帰国したならば、おそらくロベールがイングランド王位を継承していただであらう、とブルックは推測する。⁽³²⁾

一〇〇〇年夏にはロベールの帰還が迫っていた。九月初め、早ければ八月末までにはノルマンディに到着することが予測された。しかも、ロベールは帰国の途次、イタリアでアブリア伯ジェフリ・オヴ・コンヴェルサーノの娘シビルと結婚していた。その結果、かれは義父からノルマンディ公国を取り戻すのに必要な資金を得るめどが立つたのである。⁽³³⁾さらに、ロベールとシビルとの間には早晩、嫡出子が誕生することも予想された。そうなれば、当該嫡出子が父ロベールの跡を継ぐことになるであらう。言つまでもなく、それはヘンリの手からイングランド王位が恒久的に遠のくことを意味した。

こつした状況の下、ヘンリにとっては八月こそがイングランド王位を奪取する最後のチャンスのように思われたにちがない。ロベールの帰国前に行動をおこさなければ、ヘンリがイングランドないしはノルマンディを支配する好機は完全に失われてしまつてであらう。その意味でも、迅速な行動は不可欠だったのである。⁽³⁴⁾

陰謀説のもうひとつの大きな論拠は、ウォルタ・ティレルとクレア家およびギファード家との婚姻関係にもとづく結びつき（関係図参照）⁽³⁵⁾ならびに両家に対してなされたヘンリによる恩恵授与にある。

<クレア，ギファート両家とウォルタ・ティレルの関係図>



【出典】J.H.Round,“Walter Tirel and his wife”
 in *Feudal England*,1964(1895)pp.358-9;
 C.W.Hollister,“The Strange Death of William Rufus”
Speculum,vol.XLVIII,1973,p.647より、筆者作成。

ルーファス王に致命的な矢を射つたとされるウォルタ・ティレルはポワの領主にして、ポントワーズの城代でもあった。ポワはオマルからアミアンに至る交通の要衝にあつた。また、ポントワーズはショーモンとやらんでヴェクサン防衛の要となる重要な城であつた。騎士としても名を馳せていたウォルタは、一〇九八年にルーファスがヴェクサンに侵攻した際に王の知遇を得たものと思われ、イングランドに渡つてルーファスの寵愛を受けていた。⁽³⁵⁾

ウォルタ・ティレルをクレア家一族のなかに位置づけた最初の歴史家は、かのラウンドであつた。⁽³⁶⁾ ウォルタの妻アデライザは、クレア家のリチャード・フィッツ・ギルバートとウォルタ・ギファードの娘ロエーズとの間に生まれた。換言すれば、ウォルタ・ティレルはリチャード・オヴ・クレアの娘婿ということになる。ウォルタは一〇八六年以前に、義父リチャード・オヴ・クレアからエセクスのランガム・マナを下封されていた。⁽³⁷⁾ 妻（もしくは未亡人）アデライザは一三〇年にその土地を保有している。⁽³⁸⁾ それゆえ、ウォルタはおそらく一三〇年までには死去していたものと推測される。

ウォルタ・ティレルは一〇〇〇年の夏までにはルーファスのもつとも親しい友人のひとりとみなされており、つねに王と行動をともにしていた。⁽³⁹⁾ オルデリクによれば、「どこであれ、〔王に〕随行した廷臣」(ubique comes assiduus)であつた。⁽⁴⁰⁾

リチャード・オヴ・クレアの子息であるギルバートとロジャはウォルタ・ティレルの義兄で、ラウンドによればルーファスが殺害されたとき、ふたりはニュー・フォレストのブロッケンハーストにいた。⁽⁴¹⁾ 一方、もうひとりの義兄リチャードはベックの修道士であつたが、ヘンリが即位すると、空位となっていたイリの大修道院長に任じられている。ヘンリはまたルーファスが亡くなった翌日、ウィリアム・ギファードにウィンチェスタ司教職を授与している。ウィンチェスタ司教管区はイングランドでは最も富裕な司教管区であつた。さらに、クレア家のメンバーはつねにヘンリー一世の宮廷につめており、ヘンリー一世の寵臣のひとりで宮廷執事のユード Eudo Dapifer は、アデライザの姉ロウアズを妻に迎えて

いた。⁽⁴²⁾

以上の事實は、陰謀があつたことを裏づける証拠となるとはいわないまでも、少なくともヘンリがウォルタ・ティレルの親族であるクレア家一族ときわめて親しい關係にあつたことを示している。⁽⁴³⁾ ウォルタの義兄弟であつたクレア家の主要メンバーが、ヘンリの恩恵を受けていたことはまぎれもない事實である。それはティレルが陰謀の中樞にいたことを示すものではないが、クレア家のネットワークのなかに組み込まれ、いわば尖兵たる役割を担つていたことを示唆している。⁽⁴⁴⁾ ウィルフレッド・ウォレンは、ルーファスの死はヘンリのためにクレア家によつて企図され、ヘンリを通じてクレア家の利益をはかるべく、仕組まれた陰謀であつたと推測している。⁽⁴⁵⁾

ブルックやウォレン同様、陰謀説をとるオースティン・プールの言葉を借用すれば、ルーファスの突然の死は、クレア一族がたくらんだ陰謀の結果であり、ヘンリ自身もそれを承知していたのである。⁽⁴⁶⁾

三、事故説

前節でみた陰謀説は、長きにわたつて通説となつてきた感がある。これに疑問を呈し、反駁したのはアメリカの歴史家ホリスタであつた。ホリスタは陰謀説の論拠をひとつひとつ切り崩していく。

まず、ヘンリによる王位の篡奪が迅速におこなわれた事實に関していえば、ひとりヘンリのみにはまることではない。たとえば、一一三五年にヘンリ一世自身が亡くなつたとき、ステイーヴン・オヴ・ブロワはブローニーニユからロンドンに急行して王に選出され、急ぎウインチェスタに赴いて財宝库を掌握した後、ふたたびロンドンにもどつて、ウエストミンスターで戴冠式をあげている。また、ノルマン系諸侯はヘンリ一世死去の報に接する前に、みずからの領地に

急行し、資産の確保につとめた。ルーファス自身も父王ウィリアム一世の死去以前に、イングランド王位を獲得すべくルーアンをあとにしている。それゆえ、ルーファスの死に際して、哀悼の意を表する厳肅な儀式がおこなわれなかったのも、けつして驚くには値しないのである。⁽⁴⁷⁾

次に、動機の問題がある。ホリスタによれば、ルーファスが亡くなった場合、それによつて得をする者は大勢いたが、最大の利益を得る立場にあつたのはヘンリであつた。⁽⁴⁸⁾

上述の通り、ブルックによれば、ロベール・クルトウーズは十字軍に出発するさい、ルーファスと協定を交わし、イングランド王国はロベールが、またノルマンディ公国はルーファスがそれぞれ相続することを約束していたという。だが、ホリスタによれば、そのような事実はなかつた。一〇九一年に同様の協定が交わされているが、この協定は一〇九三年にロベールによつて破棄されている。⁽⁴⁹⁾一〇九六年にルーファスはノルマンディ公国を担保にとり、ロベールに対して十字軍遠征資金の貸与を約束したが、ルーファスが死亡した場合、イングランド王位はロベールの手に渡るとはひとことも言っていないのである。⁽⁵¹⁾

イングランド王位は末子ヘンリにとつてはきわめて魅力的なものと映っていたにちがいないが、ノルマンディ公国も同様であつた。ロベール・クルトウーズ、ルーファス、ヘンリの三人はすべてノルマン人であり、ジョン・ル・パトゥールが明らかにしたように、かれらはみな一個の不可分割なアングロノルマン国家を念頭においていた。⁽⁵²⁾ルーファスとロベールは、ロベールが聖地に赴く以前、八年間にわたつて互いの領地をめくり、戦をくりひろげていた。ヘンリ一世は一〇〇六年タンシブレの戦いに勝利し、ノルマンディ公国をイングランド王国に結びつけるまで、六年間ロベールと抗争をくりひろげることになる。

このようにみてみると、一〇〇〇年八月二日という日は、ヘンリの目からみれば、ルーファスの死亡時期としては必ずしも時宜を得たものとはいえない、とホリスタはいう。むしろ実際よりも一、二年前、たとえばロベールがシリアに

いる間にルーファスが亡くなっていたら、ヘンリはみずからの地歩を固める時間的余裕を確保し、難なくノルマンディを併合することもできたかもしれない、とホリスタは推測するのである。⁽⁵³⁾

いずれにせよ、ブルックが主張するような相続のとりきめはロベールが聖地に出発する三年前に消滅していた。それゆえ、ロベールが十字軍から帰国する前にルーファスを暗殺し、ヘンリをイングランド王位に即けなければ、同王位はロベールの手にわたってしまつたという陰謀説の論拠は成立しないことになる。

ところで、前節で述べたように、一九世紀末にラウンドによつて明らかにされたウォルタ・ティレルとクレア家との縁戚関係やヘンリによつてなされたクレア家に対する恩恵授与は、陰謀説の大きな根拠となっている。ホリスタはこの点についても仔細に検討をおこない、論駁する。

確かにラウンドの系図にはほとんど誤りはないが、ニュー・フォレストで狩りがおこなわれた日（一〇〇〇年八月二日）以前にヘンリがクレア家、ギファード家あるいはウォルタ・ティレルと何らかの関係があったことを示す証拠はひとつもない。さらに、狩りの一行のなかにクレア家のギルバートとロジャがいたという確証もない。⁽⁵⁴⁾ 既述のように、ラウンドはそれを事実であるかのように述べているが、実のところ、その典拠は挙げていないのである。当時の史料でふたりが狩りの場に居合わせたことを記しているのは、ジェフリ・ゲイマールだけある。かれは次のように述べている。

Or avint si: mort fut li reis.

De ses baruns ot od lui treis

Qui descenduz erent od lui;

6344 [Li] fiz Richard erent li dui—

[Quens Gilebert e dan Roger,

このようにゲイマーはルーファスが亡くなった時、傍らにいたのは三人すなわちウォルタ・ティレル、リチャード・オヴ・クレアの子息ギルバート、そしてロバートであると述べている。だが、ホリスタによれば、ゲイマーの押韻詩には誤りが多く、信憑性に欠ける。たとえば、ゲイマーはギルバート・オヴ・クレアを「伯ギルバート」(Queen's Gilbert)と呼んでいるが、ここには三八年後にステイヴン王によってペンブルック伯に任ぜられたかれの子息との混同がみられる。⁽²³⁾

また、ゲイマーは、ウインチェスタでは司教ウォークリンが夜通し王の遺体を見守っていた(Li bons evesquez Walkelin/Guaitat le rei tresquai matin)と述べているが、⁽²⁴⁾実際には同司教は一〇九八年一月に死亡しており、⁽²⁵⁾ウインチェスタ司教座はルーファスが狩りをおこなった一一〇〇年八月二日時点では空位となっていた。要するに、ゲイマーの記述は歴史的価値が疑わしいのである。⁽²⁶⁾

ラウンドは、クレア家はつねにヘンリー一世の宮廷につめていたというが、この点についてもホリスタは当時の国王特許状の認証回数を検討しながら反駁する。たとえば、ギルバート・オヴ・クレアはヘンリー一世の戴冠式(一一〇〇年)から自身の死亡時(一一一七年頃)まで、一六通の国王特許状に認証者としてその名を残している。平均すれば年に約一通である。ほぼ同時期にロバート・オヴ・ムランは一一二通の特許状を認証している。三五年に及ぶヘンリー一世治世期間を通じて、クレア家一族(七名)は合計五五通の特許状を認証しているが、バイゴット家(四名)は一一一通、ボーマン家(五名)は一六四通、ナイジェル・オヴ・アルビニとウィリアム・ピンケルナの兄弟は二三六通とクレア家の認証回数をはるかに上回っている。これらの数値は、クレア家が期待されるほど頻繁に王の宮廷に出入りしていたわけではないことを示している、とホリスタはみる。王族やソールズベリ司教ロジャ以外では、ボーマン家、フィッツ・

(23) ウィリアム・ルーファスの死をめぐる

ジョン家、アルピニ家、バイゴット家、タンカーヴィル家がはるかにヘンリー一世に近い存在であった。クレア家はこうした王の側近にはなれなかったのである。⁽⁸⁰⁾

クレア家一族は確かにヘンリー一世から恩恵を施されたが、これまた期待されるほどのものではなかった。ギルバートはウエイルズのケレディジョン（カーディガンシャー）の領主権を授与されたが、収益を得るにはまずもって当該領地における荒地の開墾に従事しなければならなかった。ギルバートの二人の弟たち、すなわちウォルタとロバートもそれぞれウエイルズとエセクスに封土を授与されたが、クレア家がペンブルック伯ならびにハートフォード伯の称号を得るのはステイーヴン王の治世になってからのことであって、ヘンリー一世治下においてではないのである。⁽⁸¹⁾

もっとも陰謀説を主張する歴史家の多くは、ヘンリー一世治世初年度における恩恵授与を重視しているので、その点をどうみることが鍵となる。これについてホリスタは次のように説明する。

一一〇〇年、長兄ロベールはイングランドへの侵攻を画策していた。ヘンリーの王位はきわめて危うい状態にあった。難局に直面したヘンリーは有力諸侯の支援をとりつけようと躍起になっていた。クレア家のリチャードをイリ司教に任じたのも、チェスタ伯ヒューの庶子ロバートをベリ・セント・エドマンズ修道院長に任じたのと同様、そのあらわれであった。ところが、リチャードは翌一一〇二年に当職を解任されている。ヘンリー王の命令に従わず一可能性として考えられるのは軍務の不履行一、王の機嫌をそこねたためである。ジェニファ・ウオードによれば、リチャードに対するイリ司教職の授与は、支持をとりつけるための「賄賂」(bribe)のようなもので、治世当初からの後援に対するヘンリーの謝意の表れではなかった。⁽⁸²⁾

また、ウイリアム・ギファードのウインチェスタ司教への任用について言えば、それは通常の恩恵授与とは別個の問題であった。すなわち、ウイリアムはルーファスの尚書部長官であった人物で、もともと司教職を授かってしかるべき地位にあったのである。それまでウイリアム征服王、ルーファスによって尚書部長官に任命された六名の人物はすべて

司教に昇進していた。それゆえ、ヘンリは従来の慣例に倣つたにすぎない。さらにヘンリがウィリアム・ギファードを任命した八月三日は、ニュー・フォレストからウィンチェスタに急行していたときで、宮廷の支持を最も必要としていた時であつた。ヘンリが現場でウィリアムを任用したのは、ギファード家からの支援というよりは、王の行政機関ならびに聖界からの支援を得ようとしたためであつた。ギファード家の当主ウォルタ・ギファードに關して言えば、一〇九七年頃ルーファスによつてバツキングラム伯に任命されていたことが分つているが、王の交代によつて得たものは何もなかつた。⁽⁶⁴⁾

ヘンリー一世治世初年度は、いふなれば「危機の年」であつた。それは一〇〇一年七月、ロベール・クルトウーズのイングランド侵攻によつて頂点に達した。ロベールがイングランド王位を篡奪しようとする、シユルーズベリー伯ウィリアム・オヴ・ベレム、モルテン公ウィリアム、サリ伯ウィリアム・オヴ・ワレンヌ、ウォルタ・ギファードといったイングランドの有力諸侯がヘンリに反旗を翻し、ロベールをイングランド王位に即けるべく画策した。⁽⁶⁵⁾

オルデリクによれば、このときヘンリに忠誠を誓い、側近として王の身近にいたのは、ムラン伯ロバート、チェスタ伯ヒュー、リチャード・オヴ・レドヴァース、ロジャ・バイゴッドであつた。ウィリアム・オヴ・マームズベリは、これらのほかにウォリク伯ヘンリ・オヴ・ポーマン、ロバート・フィッツハモンの名を挙げてゐる。⁽⁶⁶⁾

もしもクレア、ギファード両家が共謀してヘンリを王位に即けたのであるとすれば、当然のことながら、この危機に際して両家のメンバーも国王ヘンリの側近として仕えていたものと推測される。ところが、上述の通り、バツキングラム伯ウォルタ・ギファードはヘンリではなくロベール支持派のなかにいたのである。ギルバート・オヴ・クレアとその親族は傍觀者をきめこんでいたようで、どの年代記作者もとりあげていない。ホリスタが述べているように、両家とも一〇〇一年におけるヘンリの支持者リストに載つていない点は注目すべきであらう。⁽⁶⁷⁾ ジェニファ・ウォードによれば、一〇〇一年夏、ノルマンディ公ロベールを迎え撃つヘンリ側の軍勢にクレア家のメンバーが加わつていたことを示す直接

証拠は存在しないといつ。⁽⁶⁸⁾ ルーファスの死はヘンリ、クレア＝ギファード画家の陰謀の結果であるとする説は、この点でも論拠が揺らぐのである。

ところで、既述のよつに、一部の年代記者は致命的な矢を放つた人物としてウォルタ・ティレルの名を挙げているが、当のウォルタ自身はこの事件への関与を否定していた。サン＝ドニ修道院長のシユジエール（一〇八一一年頃～一一五一年）は一四〇年代に書かれた『ルイ六世伝』のなかで次のように述べている。

〈Divinatum est virum divina ultione percussum, assumpto veritatis argumento eo quod pauperum exultat intolerabilis oppressor, ecclesiarum crudelis exactor, et, si quando episcopi vel prelati decederent, irreverentissimus retentor et dissipator. Imponebatur a quibusdam cuidam nobilissimo viro Galterio Tirello quod eum sagitta perforerat. Quem, cum nec timeret nec speraret, iurejurando sepius audivimus et quasi sacrosanctum asserere quod, ea die, nec in eam partem silve, in qua rex venabatur, venerit, nec eum in silva omnino viderit.〉（試訳「その人物〔ウィリアム・ルーファス〕は、以下の理由により、神の報復によって〔弓矢で〕刺されたと考えられていたが、それも一理ある。というのも、かれは貧者にとっては耐え難き圧制者であり、教会からは残酷なまでに金銭の取り立てをおこなない、司教もしくは大司教が亡くなると、不遜きわまりないことだが、その資産を保有し、消費してしまつたからである。きわめて高貴な男ウォルタ・ティレルは、かれを弓矢で刺したとして、一部の者によって告発された。だが、ウォルタは恐れるものも望むものも一切なくなつたとき、あたかも聖遺物にかけて誓言するかのように、何度も次のように言つた。われわれは耳にした。すなわち、その日、王が狩りをしていて森の場所には行かなかつたし、森の中では王の姿をまったく見かけなかつた。」⁽⁶⁹⁾）

シユジエールが指摘しているように、ウォルタ・ティレルは当日「王が狩りをして森の場所には行かなかったし、森の中では王の姿をまったく見かけなかった」。しかもウォルタがこのような証言をしたのは一再ではなかった。さらに、当時から嘘をついたところ得るものも恐れるものも何もなかったものであり、シユジエール自身はウォルタの証言は信ずるに足るものであると確信していたにちがいない。⁽⁷⁰⁾

ジョン・オヴ・ソールズベリ(一一一五年頃―一一八〇年)は一一六〇年代に『アンセルム伝』を書き改めたが、そのなかでルーファスの死についても言及している。それによると、ウォルタ・ティレルは臨終の床で、自分はこの事件とは無関係であると証言したという。さらにウォルタは、問題の矢を放ったのが王自身であることは多くの人々が述べているところであると主張していた。ソールズベリのジョンは王の殺害者は特定できないとしながら、誰に責任があるうとも、その者は教会の受難を哀れんだ神の命を実行にうつしたにすぎないと結論づけている。⁽⁷¹⁾

ウォルタがエセクスのランガムに保有していた土地が没収されなかった事実も、いささか気になることである。これによると当時の人びとは、このできごとが事故であることをじゅうぶんに承知しており、事件の調査も必要とされなかったのかもしれない。⁽⁷²⁾

ルーファスの死を招来したニュー・フォレストにおける狩りの史料はいくつかの点で相違がみられるが、陰謀があったことを説いている年代記者はひとりもない。第一節でふれた王の死を予知するような不吉な夢や幻覚、あるいは超自然的な現象は陰謀の存在を暗示するものであるとみるむきもあるが、そうした逸話は神の予兆を信じる聖職者に特有のもので、それに類した話はルーファス以前の諸王が死去したさいにも流布していた。⁽⁷³⁾

こうしてホリスタは陰謀説をこごとく論破し、ルーファスの死は単なる事故にすぎないと結論づけた。その論調はじつに説得的であり、ホリスタの説はルーファスに関する労作をものしたフランク・パロウヤエドモンド・キングによって支持されている。⁽⁷⁵⁾

四、フランス関与説

これまで陰謀説と事故説の相反する説をみてきたが、陰謀説はホリスタによって完膚なきまでに論破されたかのように見える。ところが、一九九一年になって、やはり陰謀は存在したのではないかとする説がエマ・メイスンによって提示された。メイスンによれば、陰謀をたくらんだ首謀者はフランス王フィリップと王子ルイであり、ウォルタ・ティレルが工作員となってルーファスを暗殺したというのである。⁽²⁶⁾

ルーファスは一〇九六年以来、長兄ロベールから担保として取っていたノルマンディ公領を保有していたが、重要なのはそこからあがる収益をみずからの手中におさめていたという事実である。⁽²⁷⁾ロベールが十字軍から帰還しても、ルーファスにはノルマンディを返還する意思はまっただくなかったといわれるのも、容易にうなずける。

それどころか、ルーファスは大陸における所領の拡大を企図していたのである。ロベールの十字軍遠征が成功したことは、さらなる十字軍の呼び水となった。アキテーヌ公にしてポワトゥ伯のギイヨムが、自領のすべてを担保に十字軍の遠征費用を捻出ししようと、ルーファスに借金を申し出たのもそのあらわれであった。ルーファスはこの申し出を受け入れ、ギイヨム九世との約束を果たすべく、一一〇〇年八月二日の死亡時点ですでに莫大な資金をあつめていた。

ルーファスは亡くなる前年、すなわち一〇九九年の秋が冬ないしはそれより少しあとに、西フランスの征服戦争に着手すべく、断固たる軍事的攻勢をしかけていた。当時ルーファスは大規模な艦隊の準備、騎兵の大軍の動員、そして多額の財宝の蓄積を命じたといわれているが、オルデリクによれば、それは次の三つの目的を達成するためであった。

第一に、十字軍から帰還する予定のロベールがノルマンディ公領に入るのを武力によって阻止すること。第二に、アキテーヌ公領を「購入」すること。そして第三に、西フランスの南西地域を征服することであった。かくして、ルーフ

アスはみずからの統治領域をガロンヌ川、すなわちアキテーヌ地方とガスコーニュ地方の境界線にまで拡大しようとしていた。換言すれば、ルーファスは父王ウィリアム一世の遺産であるノルマンディ公国とイングランド王国にアキテーヌを加えようとしていたのである。⁽²⁹⁾

事実、ウィリアム・オヴ・マームズベリーによれば、ルーファスは亡くなる前日の一一〇〇年八月一日、クリスマスをここで祝うつもりかと尋ねられたのに対して、ポワティエでと答えている。⁽³⁰⁾

この点はゲイマールの著作にも記されているところで、狩りの前日、ルーファスと談笑していたウォルタ・ティレルが、何故にかくも長きにわたって征服戦争に着手しないのかと問い質すと、王は次のように返答したという。

6288 'Desci qu'as munz merrai ma gent,

En occident puis m'enirai,

A Peitiers ma feste tendrai,

A cest Noël qu'ore vendrat,

6292 Si jo tant vif, mun sied serrat'.⁽³¹⁾

右にみられるように、ルーファスは連山―おそらくはアルプス山脈⁽³²⁾―のかなたまで自分の兵を率いてゆき、それから進路を西にとり、来るクリスマスはポワティエで祝うつもりだというのである。このゲイマールの指摘は、上述したウィリアム・オヴ・マームズベリーの記述とも一致している。さらに六二九二行に述べられているように、長寿にめぐまれれば、ポワティエに居をかまえる意向であることも表明している。

それを聞いたウォルタは「それは大事だ」(‘Co est fort chose’)と驚きをかくしきれない様子であった。⁽³³⁾と同時に、

そのときウォルタは「心のなかで邪心を抱き、陰謀をたくらんでいた」(En sun quor tint sa felunie/Purpensat sei d'ine estulie) という⁽⁸⁴⁾。こつしたゲイマールの言説は、陰謀説を裏づけるひとつの傍証として見のがせない⁽⁸⁵⁾。

さて、ルーファスがポワティエで過ごすことを願っていた一一〇〇年のクリスマスに、フランスの王子ルイは父王フリップの許可を得てイングランドに渡り、国王ヘンリのもとを訪れている。このときの訪問は公式の儀礼にのっとりたもので、少数ではあるが見識ある随員を伴っていた⁽⁸⁶⁾。ダラムのシメオンによれば、ルイはヘンリがクリスマスにロンドンで開廷した宮廷に出席したという⁽⁸⁷⁾。メイスンは、この会談では北フランスにおける所領の境界画定やロベール・クルトウズの処遇も議題に含まれていたにちがいないと推測する。だが、フランス側の最大の関心は、ルーファスが死の直前まで押し進めていた対仏遠征が中止されたのかどうか、それを確認することにあつた⁽⁸⁸⁾。

ところで、フランスに逃走し、ピカルディの領地に身を寄せたウォルタ・ティレルはその後、どうなったのであろうか。姿をくらし、世に忘れ去られた存在となつてしまつたのであろうか。実際は、けつしてそうではなかつた。一一〇二年頃、ポントワーズ近郊にある自分の館でルイを歓待し⁽⁸⁹⁾、一一一三年にはルイがクリュニー修道院のために発給した特許状を認証している。さらに一一一八年、ウォルタはポワに聖アウグステイヌ修道院を創建し、それをフランスの守護聖人であるサン・ドニに奉献した⁽⁹⁰⁾。みづから創建した修道院をサン・ドニに奉献していることは、ウォルタがフランス王に忠実なフランス人であつたことを示す証左であるといえよう⁽⁹¹⁾。

いずれにせよ、フランスに戻つてからのウォルタは、イングランドに渡航する前と同じように、ポントワーズやポワを拠点にフランス王室と密接な関係を保つていたのである。

こつしたところから、ウォルタ・ティレルはフランス王室が放つた二重スパイではなかつたか、とメイスンは推測する。メイスン説によれば、ウォルタ・ティレルはいったんフランスの大義を捨ててルーファスに任せ、ルーファス暗殺後、ふたたびフランスに舞い戻つて来たことになる。ルーファスの暗殺は、なによりも西フランスにおける勢力均衡を

はかる必要性から計画されたものであった。⁽⁹²⁾ 換言すれば、ルーファスが抱いていたノルマンディおよびアキテーヌにおける領土的野心が、フランス王フィリップと王子ルイをしてルーファスの暗殺に向かわせたのである。

修道院長シュジエールが述べているように、フランス側は自軍の勢力とイングランド側の軍勢では雲泥の差があることをじゅうぶんに認識していた。⁽⁹³⁾ 当時、フランスはイングランドの大軍に脅威を感じていたのである。メイスンによれば、ヘンリ同様、フィリップやルイにとつても、ルーファスの死から得るものは大きかった。ルーファスの暗殺は、イングランド王の軍事的侵攻とそれに伴う領土拡大を阻止すべく、フランス王家によって計画された可能性が高いのである。⁽⁹⁴⁾

このようなメイスンの所説に対して、ジュディス・グリーンはルーファスがノルマンディを兄ロベールに返還しなければならぬ時期が差し迫っていたこと、そしてロベールが帰国すればノルマンディの統治は従来よりも緩和されることが予想されることから、フィリップとルイが謀殺を企てたとはとうてい考えにくいという。⁽⁹⁵⁾ また、殺人、ましてや兄弟殺しの嫌疑がかけられていたとするならば、同時代の史料にそれを暗示するものがあつてしかるべきであるが、そのような証拠は存在しない。さらに、謀殺の疑いがあつたとすれば、当然噂がひろまっていたはずであるが、その痕跡もないという。結局、ルーファスの死は事故死である可能性がすこぶる高いとグリーンは結論づけ、結果として、ホリスタヤバロウの唱える「事故説」に傾斜している。⁽⁹⁶⁾

おわりに

一九世紀末のフリーマン以来、ウィリアム・ルーファスの死は歴史家の間でさまざまな憶測をよび、今日に至っている。同時代の年代記史料では、ルーファスの死は狩猟中の事故として描かれているが、同時にそれは教会権益を不当に

侵奪した王に対して神が下した正当な罰であるとみなされていたことが明らかである。

また、ルーファスのみならず、ウィリアム征服王の次子リチャードならびにロベール・クルトウーズの庶子リシャールの死もウィリアム征服王によるニュー・フォレストの創設と結びつけられ、天罰と解された。こうした見方には、当時の年代記作者、すなわち聖職者に特有の偏差⁽⁸⁵⁾がかかっていることは否めないが、それでも同時代人がフォレストに対して抱いていた反感ないしは憎悪の念が反映されているとみてよいであろう。

陰謀説のキー・パースンともいえるウォルタ・ティレルは忠誠心を金銭で買われた者のひとりであった。ウォルタがルーファスの宮廷で賓客として優遇されたのは、フランスにおける彼の地位にある。既述のように、ウォルタはポワの領主にしてポントワーズの城代であったが、ポントワーズ城はヴェクサン⁽⁸⁶⁾の安全の鍵を握る重要な城であり、ルーファスにとって自らの軍事遠征を成功に導くには、同城の支配が必須の要件とされた。

他方、フランス王の目からみても、フレンチ・ヴェクサンに城をかまえるウォルタ・ティレルの重要性は明らかであった。大陸における領地拡大をもくろんでいた当時のルーファスの行動をあらためてふりかえてみると、メイソンがウォルタはポワトウの乗っ取り計画を阻止すべく放たれた二重スパイではなかったか、と推測するのもうなずける⁽⁸⁷⁾。

事故説をとるホリスタによれば、ウォルタ・ティレルはルーファスがノルマンディで雇い入れた傭兵のひとりであった。そして、「皮肉にも、かれ(ルーファス)は自分自身の傭兵のひとりの手によって死に遭遇したように思われる」と述べ、問題の矢を放ったのはウォルタ・ティレルである可能性が高いことを示唆している。とはいえ、ウォルタには暗殺の意図はまったくなく、ルーファスの死はあくまでも狩猟中の事故によるものであったとホリスタは主張する。

事故説と相對するこれまでの陰謀説は、いふなればイングランド史の文脈でのみ考えられたものであった。メイソンによってウィリアム・ルーファスの死はイングランド史の文脈から抜け出し、フランス史の文脈のなかで見直されることになった。ルーファスの死をフランス側の視点からみる視点そのものは、たしかに斬新なものであった。だが、その

所説は従来の陰謀説同様、あくまでも状況証拠に拠るものであり、いまひとつ決め手に欠けるように思われる。第四節でみたように、たとえばゲイマールはウォルタが陰謀を企図していたと述べており、それ自体は信憑性があるとしても、なにぶんフランス主導で陰謀が企てられたことを示す直接証拠は存在しないのである。同様のことは、第二節でみたクレア家主導による陰謀説についてもあてはまる。

本稿の第一節においてみたように、当時の年代記作者は、陰謀についてはひとつも触れていない。つまり、ルーフアスはヘンリ、クレア家、それにウォルタ・ティレルを巻き込んだ陰謀によって暗殺されたという説には、確固たる史料の裏づけがないのである。

リチャード・ハスクロフトは最近刊行された著書のなかで、メイスン説を引き合いに出しながら、ルーフアスは暗殺されたという思いがどうしてもめぐえないと結論づけているが、筆者にはルーファスの死はたんなる事故にすぎなかったのではないかという思いの方が強い。

註

(一) ニュー・フォレストの原義は「新たに創設された御狩場」であって、「新たに造林された森」ではない。ロイヤル・フォレスト(御料林、御狩場)のひとつであるニュー・フォレストの創設とその歴史については、それ自体おおきな問題であり、本稿では扱わない。さしあたり、以下を参看。平松 紘『イギリス環境法の基礎研究』敬文堂、一九九五年、八五～二二六頁。F. A. Barking, "The making of the New Forest", *English Historical Review*, XVI, 1901, pp. 427-438, reprinted in *Domestic tables for the counties of Surrey, Berkshire, Middlesex, Hertford, Buckingham and for the New Forest*, London, 1909, pp. 194-205; H. C. Darby, *Domestic England*, Cambridge University Press, 1977, reprinted 1979, pp. 198-201; J. R. Wise, *The New Forest: Its History and Scenery*, London, 1883, republished 1971; C. R. Tubbs, *The New Forest: An Ecological History*,

- Newton Abbot, 1968 : P.Gorrip, *The New Forest, Woodlands*. The Forestry Commission, 1999: K.Mew, "The Dynamics of Lordship and Landscape as Revealed in a Domesday Study of the *Nova Foresta*", *Anglo Norman Studies*, 23, 2001, pp.155-166.
- (2) *The Anglo-Saxon Chronicle*, ed. and trans. G.N.Garmonsway, London, 1953, reprinted 1975(資料) ASC(資料), p.235.
- (3) Margaret A. Murray, *God of the Witches*, Oxford, 1933, Nu Vision Publications, LLC, 2005, pp.121-5.
- (4) R.W.Southern, *Saint Anselm and his biographer*, Cambridge, 1963, pp.63, 122; Thomas Callahan Jr., "The Making of a Monster: the Historical Image of William Rufus", *Journal of Medieval History*, 7, 1981, pp.176-7.
- (5) Eadmer, *Historia Novorum in Anglia*, ed.M.Rule, Rolls Series, London, 1884, reprinted 1965, p.116.
- (6) Thomas Callahan, Jr., *op.cit.*, p.177; 書籍の厳密な意味を同時代の著作家としてみたユーザーは「一語のバリエーション・ルーンズに敵対的であった。E.Mason, "William Rufus: Myth and Reality", *Journal of Medieval History*, 3, 1977, p.1. ちなみに、メイスンは本論文における「ウィリアム・ルーンズ」は教皇を不当に抑圧したウーゴの一般に流布しているルーンズ像は、年代記作者によってかなり誇張されたものであると「その論点をいじめること」(Ibid., pp.1-20)。
- (7) ASC, p.235.
- (8) Thomas Callahan, Jr., *op.cit.*, p.178; なお、本稿の終へ輔材料の整理については E.A.Freeman, *The Reign of William Rufus and the Accession of Henry I*, 2 vols., Oxford, 1882, AMS edition, 1970, vol.II, pp.657-676, NOTE SS "The Death of William Rufus" 参照。
- (9) A.Grasden, *Historical writing in England, c.550-c.1307*, London, 1974, pp.142-6; Thomas Callahan, jr., *op.cit.*, p.178.
- (10) *The Chronicle of John of Worcester*, vol. III, ed. and trans. P. McGurk, Oxford, 1998(資料) JW(資料), pp.92-3.
- (11) William of Malmesbury, *Gesta Regum Anglorum The History of the English Kings*, vol.1, ed. and trans. R.A.B.Mynors, completed by R.M.Thomson and M.Winterbottom, Oxford, 1998(資料) WM, GR(資料), pp.504-5.
- (12) *The Ecclesiastical History of Orderic Vitalis*, ed. and trans. M.Chibhall, 6 vols., Oxford, 1969-80(資料) OV(資料), vol.V, pp.284-5.
- (13) WM, GR, pp.572-5; E.A.Freeman, *op.cit.*, p.327-9; F.Barlow, *William Rufus*, London, 1983, p.427; E.Mason, *William II: Rufus, the Red King*, Stroud, Gloucestershire, 2005, p.220.
- (14) F.Barlow, *op.cit.*, p.427.
- (15) WM, GR, pp.574-5.
- (16) W.L.Warren, "The Death of William Rufus", *History Today*, IX, January, 1959, p.24.
- (17) F.Barlow, *op.cit.*, p.429.

- (18) OV, vol.V, pp.288-9, *なげ* 本文の引用文中 de his quae audiri' 監下ニ付テ トーントニ遊ベ^レ E.A.Freeman, *op.cit.*, pp.329-330.
- (19) OV, vol.V, pp.284-7; F.Barlow, *op.cit.*, p.429; E.Mason, *William II*, p.221.
- (20) *Ibid.*, pp.423-4.
- (21) OV, vol.V, pp.290-1.
- (22) Henry, Archeacon of Huntingdon, *Historia Anglorum The History of the English People*, ed. and trans. D.Greenway, Oxford, 1996, pp.446-7.
- (23) クンニ・オウ・ハンチントンがウイリアム二世の説明を基本的に『マンサロ＝サクソン年代記』に書いているようにして A.Grasden, *op.cit.*, pp.194,198; D.Whitelock and others eds. *Anglo-Saxon chronicle*, London, p.xix; Thomas Callahan, Jr, *op.cit.*, p.180.
- (24) OV, vol.V, pp.248-291, JW, III, s.a.1100, pp.92-3, ASC, s.a.1100, p.235; W.L.Warren, *op.cit.*, pp.24-26; E.Mason, *William II*, p.220, 同様の見方は『ノルマン諸公の事績』に書かれている。“Ferunt autem multi, quod ideo hi duo filii Willelmi regis in illa silva iudicio Dei perierunt, quoniam multas villas et ecclesias propter eandem forestam amplificandam in circuitu ipsius destruxerat.” (*The Gesta Normannorum Ducum of William of Jumièges, Orderic Vitalis, and Robert of Torigni*, vol.II, ed. and trans. Elisabeth M.C. Van Houts, Oxford, 1995, p.216) すなわち、ウイリアム二世のふたりの子息は神の審判によつてノー・フォレストで落命した。ところが、同王がそのノーフォレストを拡張するために、周囲にあった（ノーフォレストの境界付近にあった）多くの家屋や教会をとり壊したからである。と云ふ。
- (25) F.H.M.Parker, “The Forest Laws and the Death of William Rufus”, *English Historical Review*, XXVII, 1912, p.31.
- (26) 但し、すゝこの著者がウォルター・ティレルを殺害者としているわけではない。たゞ、キラルド・カントラン（1146年頃～1133年）にすれば、ルーファスを殺害したのはRadulphus de Aquisなる騎士であることである。
- “Prior autem cum responderet se ob aliud nunc venisse majoremque veniendi causam et urgentiorem habere, seorsum stam rege vocato dictaque secretius ei visione per ordinem tota, monuit ut in forestam tunc nullatenus iret, sed incontinenti se Deo reconciliaret, et erga ecclesiam Dei se protinus emundaret. Et, ecce, nondum sermone finito, vir quidam, similimus illi quem sagittas presentantem in somno viderat, quinque sagittas, tales quales in somno viderat, regi presentavit, quas illico militia tradidit, cui nomen Radulphus de Aquis, ad ferendum secum in forestam, priore quantum potuit et dissuadente nec praevalente. Unde et ab eodem milite continenter in silva una sagittarum illarum arcu missa perforatus interit.” (*Giraldi Cambrensis Opera*, III, *De Principis Instructione*

Liber, ed. George F. Warner, London, 1891, reprinted 1966, p.325)。同じにみられるように、「タンスタブルの」修道院長が王（ルーファス）に森（ニュー・フォレスト）に決して行かないよう警告したものの、王はそれに耳をかさず、Radulphus de Aquis の放った矢を受け、横死したのである。文中、修道院長が夢でみた人物によく似た男が、同じように修道院長が夢でみたような五本の弓矢を王に献上し、それを王がRadulphus de Aquis に手渡したという記述は、先にみたオルデリク・ヴィターリスのそれを想起させる。なお、エマ・メイソンによれば、当史料に出づくるRanulf(Raoul) d'Equenes はウォルター・ティレルの借地人^{チャイルド}で、問題の矢を放った人物はこの男であることをギブルドゥスは示唆しているとい⁷⁰。

- E.Mason, *William II*, p.230. Cf.E.A.Freeman, *op.cit.*, p.325.
- (27) *Ibid.*, p.326.
- (28) William M.Aird, *Robert Curthose, Duke of Normandy, c.1050-1134*, The Boydell Press, Woodbridge, 2008, pp.195-6; E.Mason, *William II*, p.224.
- (29) ASC, p.236; OV, vol. V, pp.294-5.
- (30) C.N.L.Brooke, *The Saxon and Norman Kings*, 1963, 3rd edition, Oxford, 2001, p.153.
- (31) D.Grimmel-Milne, *The Killing of William Rufus: An Investigation in the New Forest*, David and Charles, Newton Abbot, 1968, p.141.
- (32) C.N.L.Brooke, *op.cit.*, p.153.
- (33) OV, vol. V, pp.278-281.
- (34) C.N.L.Brooke, *op.cit.*, p.154.
- (35) *Cartulaire de l'Abbaye de Saint-Martin de Pontoise*, ed.J.Depoin, Pontoise, Société Historique du Vexin, 1909, pp.452-3; F.Barlow, *op.cit.*, pp.407, 377 (map) ; A.L.Poole, *From Domesday Book to Magna Carta, 1087-1216*, 2nd edition, Oxford, 1955, p.112; Judith Green, "Lords of the Norman Vexin", in ed.John Gillingham and J.C.Holt, *War and Government in the Middle Ages, essays in honour of J.O.Prestwich*, The Boydell Press, Woodbridge, 1984, pp.48-49.
- (36) J.H.Round, "Walter Tirel and his wife", in *Ferdal England*, 1895, new edition, New York, 1964, pp.355-363.
- (37) *Domesday Book 32 Essex*, ed. Alexander Rumble, Phillimore & Co.Ltd., London and Chichester, 1983, 41a.; J.H.Round, *op.cit.*, p.355; E.A.Freeman, *op.cit.*, pp.673-4.
- ノルマン征服以降、有力家門としての地歩を築いたクレア家はとりわけヘンリー一世治下において多くの土地を獲得し、その勢力を拡大する。他方で、それは修道院への惜しみない寄贈につながった。クレア家の所領形成と借地人、ならびに

- 回條ノ總綱並ニの條ビニセリトシテ、ナドヲ參照” Richard Mortimer, “The Beginnings of the Honour of Clare”, *Anglo-Norman Studies*, III, 1981, pp.119-141; *idem*, “Land and Service: the Tenants of the Honour of Clare”, *Anglo-Norman Studies*, VIII, 1986, pp.177-197; Jennifer C. Ward, “The Lowy of Tonbridge and the Lands of the Clare Family in Kent, 1066-1217”, *Archaeologia Cantiana*, XCVI, 1980, pp.119-131; *idem*, “The Place of the Honour in Twelfth-century Society”, *Proceedings of the Suffolk Institute of Archaeology and Natural History*, XXXV, 1983, pp.191-202; *idem*, “Fashions in Monastic Endowment: the Foundations of the Clare Family, 1066-1314”, *Journal of Ecclesiastical History*, XXXII, 1981, pp.427-451; *idem*, “Royal Service and Reward: the Clare Family and the Crown, 1066-1154”, *Anglo-Norman Studies*, XI, 1989, pp.261-278; Emma Cownie, *Religious Patronage in Anglo-Norman England 1066-1135*, The Boydell Press, Woodbridge, 1998, pp.54, 61, 64, 75, 78, 123-4, 126-7, 141, 161, 167, 169, 170, 172, 174, 176-8, 180, 182, 192, 196-7, 212, 213.
- (38) *The Pipe Roll of 31 Henry I*, ed.J.Hunter, 1833, reproduced in facsimile, London, 1929, p.56; J.H.Round, *op.cit.*, pp.355, 357; E.A.Freeman, *op.cit.*, p.674. **ナドヲ** ウォルター・チャイルド監ニシテ *Oxford Dictionary of National Biography*, ed.H.C.G.Matthew and Brian Harrison, Volume 54, Oxford University Press, 2004 所収; Trel, Walter’**の條**ヲ參照” **ナドヲ**ニテ 前項の條總担ヲ兼テホリスヌ” (C.Warren Hollister) **ト** **ナドヲ**。
- (39) F.Barlow, *op.cit.*, p.407.
- (40) OV, vol.V, pp.288-9.
- (41) J.H.Round, *op.cit.*, p.357.
- (42) OV, vol.V, pp.296-7; J.H.Round, *op.cit.*, pp.357-8.
- (43) *Ibid.*, p.358.
- (44) C.N.L.Brooke, *op.cit.*, p.154.
- (45) W.L.Warren, *op.cit.*, p.29.
- (46) A.L.Poole, *op.cit.*, p.114.
- (47) C.Warren Hollister, “The Strange Death of William Rufus”, *Speculum*, vol. XLVIII, Number 4, October 1973, pp.642-3.
- (48) *Ibid.*, p.643.
- (49) ASCp, 226; John Le Patourel, “The Norman Succession, 996-1135”, *English Historical Review*, LXXXVI, 1971, p.243. **總担**ニ

- 容(骨子)は、ロベールが嫡出子を残さずに死亡した場合は、ルーファスがノルマンディの相続人となる。一方、ルーファスが死亡した場合は、ロベールがイングランドの相続人となるといつものであった。
- (50) ASC,p.228; Charles H.Haskins, *Norman Institutions*, Harvard University Press,1918,p.79.
- (51) ASC,p.232; C.Warren Hollister, *op.cit.*,p.644.
- (52) John Le Patourel, *Normandy and England,1066-1144*, Reading,1971:*idem*, "The Norman Succession,996-1135", pp.225-250; ルーパトゥレルの学説については、佐藤伊久男「前期プランタジネット朝の歴史的地位」ー「イングランド国民国家」形成史覚え書ー、吉岡昭彦編著『政治権力の史的分析』、御茶の水書房、一九七五年所収、八六ー一〇四頁参照。
- (53) C.Warren Hollister, *op.cit.*,p.644.
- (54) *Ibid.*,p.646.
- (55) *L'Estoire des Engleis by Geoffrei Gaimar*, ed.A.Bell, Anglo-Norman Text Society, XIV-XVI, Oxford,1960,p.201; Cf.*L'estoire des Engles solum La Translation Maistre Geffrei Gaimar*, eds.T.Duff Hardy and C.T.Martin,2vols,Rolls Series, London,1888-9,vol.II, p.200.
- (56) C.Warren Hollister, *op.cit.*,p.648.
- (57) *L'Estoire des Engleis by Geoffrei Gaimar*,p.203,lines 6415-6; Cf. *L'estoire des Engles solum La Translation Maistre Geffrei Gaimar* vol.II, p.202. なお、引用文中の「スラッシュ」記号(/) は改行を意味する。
- (58) ルーファス出身の「ウォークリン」Walkelinは一〇七〇年に国王礼拝堂付司祭からウインチェスター司教に登用され、一〇九八年まで同職に就いた(F.Barlow, *The English Church,1066-1154*, London,1979,pp.62,72)。彼は国王の代理も務めるなど、ルーファスの信任が厚かった(高沢壽幸『イギリス中世国制史の研究』、関西大学出版・広報部、一九七八年、一三九頁)。
- (59) C.Warren Hollister, *op.cit.*,p.648.
- (60) *Ibid.*,p.648.
- (61) *Ibid.*,pp.648-9.
- (62) *Ibid.*,p.650; C.Warren Hollister, *Henry I*, Yale University Press, 2001,p.166. 山代宏道『ノルマン征服と中世イングランド教会』、溪水社、平成八年、一五二頁：一〇〇〇年になされたリチャード・オウ・クレアのイリ司教への任命と翌一〇二二年における解任に関しては、次の史料を参照。OV, vol.V, pp.296-7; Padner, *Historia Novorum in Anglia*, ed.M.Rule, Rolls Series, London,1884,reprinted 1965,p.142; *Liber Eliensis*, ed.E.O.Blake, Camden 3rd series, vol.XCII, London,1962,pp.226-7,413; 但し「リチャードは一一〇五年二月末には再びイリ司教に叙任されていた。リチャードは一一〇三年一月には再び

に同回終禮に慶禮のついでに禮料の給へ。この頃のついでに Lauren Helm Jared, "English Ecclesiastical Vacancies

During the Reigns of William II and Henry I", *Journal of Ecclesiastical History*, vol.42, No.3, 1991, pp.376,390 (Appendix).

(68) Jennifer C.Ward, "Royal Service and Reward:the Clare Family and the Crown,1066-1154", p.268.

(69) O.V., vol.V., pp.296-7 and 297 note 5; C.Warren Hollister, "The Strange Death of William Rufus", p.650; 山代宏道 前掲 一四一頁。

(70) ASC,p.237; O.V., vol.V., pp.306-9; WM, GR,vol.I, pp.716-7; C.W.David, *Robert Curthose, Duke of Normandy*, Cambridge, Mass., 1920, p.130.

(71) O.V., vol.V., pp.314-5; WM, GR,vol.I, pp.716-7; C.W.David, *op.cit.*, pp.127-8.

(72) C.Warren Hollister, "The Strange Death of William Rufus", p.650.

(73) Jennifer C.Ward, "Royal Service and Reward:the Clare Family and the Crown,1066-1154", p.268.

(74) Suger, *Vie de Louis VI le Gros* ed.and trans., H.Waquet, Societe d'edition "Les Belles Lettres", Paris, 1929, pp.12-13.

(75) W.L. Warren, *op.cit.*, p.29.

(76) "Siquidem secunda die mensis Augusti, quae post visionem Lugduni factam illuxit, idem rex in silivam, quae Nova Foresta vocatur ab incolis, venatum mene profectus est: ibique in latere sagittam excipiens, corde sauciato emisit spiritum suum. Sic, sic patiente Basilio, letali telo ad consolationem Ecclesiae perimitur Julianus; et altero Juliano perempto in Anglia, ad consolationem Ecclesiae revocatur Anselmus. Qui alterutrum miserit telum, adhuc incertum est quidem. Nam Walterus Tyrrellus ille, qui regiae necis reus a plurimis dictus est, eo quod illi familiaris erat et tunc in indagine ferarum vicinus, et fere singulariter adhaerebat, etiam cum ageret in extremis, se a caede illius immunem esse, invocatio in animam suam Dei iudicio, protestatus est. Fuerunt plurimi, qui ipsum regem jaculum quo interemptum est misisse asserunt, et hoc Walterus ille, etsi non crederetur ei, constanter assererat. Et profecto quisquis hoc fecerit, Dei Ecclesiae suae calamitatibus compatiens dispositioni fideliter obediuit." (*Joannis Saresburiensis Vita Sancti Anselmi Cantuariensis, in Patrologiae Latinae Cursus Completus*, ed. J.P. Migne, CXCIX, col.1031.)
このお祭りは、騎士たちが鹿の群れを覗き込んで、いぬを獲り、用ひ猟を止める記録があるから、その頃には鹿味深し。

(77) C.Warren Hollister, "The Strange Death of William Rufus", p.652.

- (73) F.H.M.Parker, *op.cit.*,p.32.
- (74) C.Warren Hollister, "The Strange Death of William Rufus", pp.641-2; エマ・メイソンによれば「つづいた夢や超自然的な現象は、ルファスの死の直前に流布したものではなく、後世の年代記作者たちが「悪しき王」(“bad king”)は突然、死に遭遇するといふ物語を編む際に、死の前兆としてふたたびわしいと考え、挿入したものであろう」と。E.Mason, *William II*, p.219.
- (75) F.Barlow, *op.cit.*,p.425; Edmund King, *Medieval England,1066-1485*Oxford,1988,p.29 (エドモンド・キング、前掲書同題訳『中世のイギリス』慶應義塾大学出版会、二〇〇六年、三九頁)。
- (76) E.Mason, "William Rufus and the Historians", *Medieval History*, 1,1991,pp.17-22.
- (77) Charles H.Haskins, *op.cit.*,1918,pp.78-84; Bernard S.Bachrach, "William Rufus's Plan for the Invasion of Aquitaine," in *The Normans and their Adversaries at War:Essay in Memory of C. Warren Hollister*, eds.Richard P.ABELS and Bernard S.Bachrach, The Boydell Press, Woodbridge,2001,p.38.
- (78) William M.Aird, *op.cit.*,p.194. キヤロムは、アキテーヌ公としては九世、ポワトゥー伯としては十世。
- (79) OV, vol.VI, pp.280-1; Bernard S.Bachrach, *op.cit.*,p.31.
- (80) WM, GR.vol.1, pp.576-7.
- (81) *L'Estoire des Engleis by Geoffrei Gaimar*,p.199; Cf. *L'estoire des Engles solum La Translation Maistre Geffrei Gaimar*,vol.II,p.199.
- (82) E.A.Freeman, *op.cit.*,p.323.
- (83) *L'Estoire des Engleis by Geoffrei Gaimar*, p.199,line 6293.
- (84) *Ibid.*,p.199,lines 6301-2.
- (85) 歴史の史料価値は小さいといわれるケイマールだが、この点については信頼がおける(A. Gransden, *op.cit.*,p.212)。
- (86) OV, vol.VI, pp.50-51.
- (87) *Symeon's Monachi Opera Omnia*, ed.T.Arnold, vol.II, Rolls Series, London,1885, reprinted 1965, p.232; Judith A.Green, *Henry I, King of England and Duke of Normandy*, Cambridge,2006,p.40.
- (88) E.Mason, *William II*, p.231.
- (89) *Cartulaire de l'Abbaye de Saint-Martin de Pontoise*, ed.J.Depoin, Pontoise, Société Historique du Vexin,1895,pp.38-39.
- (90) *Ibid.*,1909,pp.453-4.
- (91) E.Mason, "William Rufus and the Historians",p.19.

- (92) *Ibid.*, pp.19-20.
- (93) Suger, *Vie de Louis VI le Gros*, p.8 ; E.Mason, *William II*, p.229.
- (94) E.Mason, "William Rufus and the Historians", p.20 ; E.Mason, *William II*, p.229.
- (95) Judith A.Green, *op.cit.*, p.40.
- (96) *Ibid.*, pp.40-41.
- (96) それゆえに、修正される必要がある。当時の諸年代記がどの程度までフォレストの実態を正確に伝えているかどうかは、それ自体ひとつの大きな問題である。今後の課題として。
- (98) F.Barlow, *op.cit.*, pp.407,377 (map) ; A.L.Poole, *op.cit.*, p.112.
- (99) E.Mason, "William Rufus and the Historians", pp.19-20.
- (100) C.W.Hollister, *The Military Organization of Norman England*, Oxford,1965,p.180.
- (101) R.Huscroft, *Ruling England,1042-1217*, Pearson Education Limited,2005,p.67.